

開会礼拝説教

5

(聖書 ルカによる福音書第10章25～37節)

25 すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」26 イエスが、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と言われると、27 彼は答えた。『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります。」28 イエスは言われた。「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」29 しかし、彼は自分を正当化しようとして、「では、わたしの隣人とはだれですか」と言った。30 イエスはお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。31 ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。32 同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。33 ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、34 近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。35 そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。』36 さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」37 律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」

25 ① 使徒信条、十戒、主の祈り、この三要文（さんようもん）は日本の教会の歴史の最初から重んじられた。教会関係最初の印刷物と言われる。使徒信条を今日は用いる。
② 今は重んじられることが少ない十戒であるが、横浜で、英語でなされたヘボン指導の最初の礼拝で用いられたと言う。
③ 礼拝のどこで用いるか。最も多くは礼拝の最初の方で。礼拝が悔い改めに始まるからである。ミサも同じ。キリエ・エレイソン（主よ、憐れみたまえ）から始まる。悔い改めは律法を聴きつつ行われる。律法の言葉を唱えつつ、自分を吟味し、罪を確認する。ルターはそう教えた。カルヴァンも、ストラスブールの教会のために書いた「祈りの順序」では、十戒を唱えさせ、一つの戒めごとにキリエ・エレイソン（主よ、憐れみたまえ）と祈った。カトリックのミサと同じである。

35 1517年10月31日 ヴィッテンベルクに掲げられたルターの95条の提題・第一の提題は言

う。

「私どもの主であり、師であるイエス・キリストが『悔い改めなさい』と言われたとき、私どもの全生涯が〔日毎の〕悔い改めであることを求められたのである」。

④ 律法の要約という言葉がある。現代の教会では、これの方を唱えることも多いと言う。十戒に代わって唱える。主イエスが教えておられる。マタイによる福音書第22章34節以下の記事である。だがここ〔ルカ福音書〕では律法学者が語る。主の問いに答えて。26節。どのように唱えているか、と主は問われた。礼拝で。日々の祈りで。神への愛・隣人への愛が問われる。どう唱えているか。どう生きているか。28節の主の言葉は、その通り生きればいい、と言われる。

⑤ 愛の律法。律法を要約すると愛になるということはどういうことか。不思議な表現。エフェソの信徒への手紙第2章15節。「戒律づくめの律法」という言葉がある。律法は戒律だ。愛の律法とは愛の戒律なのか。律法は何々すべし、と語る。しかし、愛とは愛すべし、と命じられ、それを守ることなのか。例えば王のような権力者といえども、若い娘に私を愛しなさい、と命じ、あるいは法律を作っても愛は生まれない。愛の法はあり得ない。しかし、聖書は愛を命じる。愛の律法を語る。それは何を意味するのか。神の愛とはそういうものだ、と言える。だがなぜ言えるのか。愛は律法だという。だがどのような愛なのか。律法なのか。律法は不自由を強いると考えられる。しかし、愛は完全な自由であるはずである。愛の律法は自由な律法でなければならない。タテマエではなく、ホンネなのである。

⑥ あるキリスト教女子高校の3年生の修養会の講師としての体験。一緒にバスに乗って行った。車中で宿における部屋割りには生徒に自由に決めさせたと聞いた。一緒に生活したい者が集まる。それが楽しみだと言う。講演の中でこれを批判して、厳しい攻撃を受けた。聖書の教えに反すると言ったので教師たちからも批判を受けた。生徒の自主性を重んじたのだと言う。しかし、最後の日、生徒たちは、その誤りを認めた。ある者は涙を流して、反省の思いを語った。どこが間違っていたのか。宿題とする。分団で考えていただいてもよい。

⑦ 律法学者は自分を正当化するために、私の隣人とは誰かを問うた。彼は彼なりに隣人を愛していた。その愛を正当化していたのである。私の愛に値する者を選ぶのである。だから愛すべき隣人とはどこの誰かを問う。答えが与えられたら、愛したであろう。自分の理解する愛で。自分を正当化し、自分を義とすることができる愛を生きていたのである。そこで主イエスは、私どもがよく知る「善いサマリア人」の譬え話をなされた。律法学者の自己正当化（自己義認）をただすためである。ドイツ語圏では「憐れみ深いサマリア人」という表題をつける。日本語訳は英語訳と共に間違った理解をさせる危険な題である。善玉キリスト者と悪玉ファリサイ派という人間理解を産むような理解、教え方は間違っている。自己義認を促す小見出しである。

⑧ 急所は「憐れに思い」という表現である。「憐れに思う」（スプラנקニゾマイ）という言葉である。はらわたが痛むような憐れみ、同苦の思いである。サマリア人を動かしたのは、道徳原理に基づく良心的判断、決断ではなかった。ここが動いたのである。自由に、自然に、

- 最もそのひとらしいところの動きがあったのである。このスプランクニゾマイという言葉は、第7章13節では、一人息子を喪った母を見たときに、死に圧倒されている惨めな人間に対する主イエスの内面に生まれたところを表している。第15章20節では、失われた息子が帰ってくるのを走り寄って迎えた父のところを表している。父である神の、神に背き、神から去っている私ども罪人に対するみこころを表す。従って、ここでも、サマリア人は、主イエスご自身のことであるという理解が古代から行われてきた。現代においても強力に主張されている。むしろ力を増している。ファリサイ派のように自分を正当化することにのみ心を奪われ、痛み、苦しむひとの現実のところ痛むことがないことを悲しむ思いがある。主の憐れみがなければ慰めはないのである。
- 10 ⑨ 主の憐れみは律法学者に向けられる。ドイツの説教者の多くは、傷ついた旅人は律法学者だと理解する。主は、自分を試す者を憐れんでおられる。このひとの隣人になってくださっている。しかも、おそらく、律法学者自身は、主イエスが裁かれるとき、十字架につけよ！と叫んだであろう。しかし、まさにそのひとのために痛みを負う主の憐れみは貫かれた。私どものために！
- 15 ⑩ マザー・テレサは、毎日、早朝のミサにおいて聖体を受けていたようである。その姿を映画で見て感銘を受けた。私どももまた同じである。説教とともに、聖餐が語り、味わわせてくれる主の恵みを深く知りたい。修養会でも、ともに聖餐を祝う礼拝をすることがあってもいいであろう。
- 20 ⑪ こうして憐れみに生きるサマリア人の共同体としての教会が生まれているのである。主の憐れみによって癒され、慰められ、生かされる共同体である。憐れみ、痛みを常に覚える共同体であり続けるのである。

講演資料

(参考文献として挙げている『慰めのコイノーニア』を読んでいただけることを前提にして語る。各教会で読書会でもしていただけるとありがたい。)

5

聖書テキスト その1

1. ローマの信徒への手紙第15章14節以下

14: 兄弟たち、あなたがた自身は善意に満ち、あらゆる知識で満たされ、互いに戒め合うことができる、このわたしは確信しています。15: 記憶を新たにしてもらおうと、この手紙ではところどころかなり思い切って書きました。それは、わたしが神から恵みをいただいて、16: 異邦人のためにキリスト・イエスに仕える者となり、神の福音のために祭司の役を務めているからです。そしてそれは、異邦人が、聖霊によって聖なるものとされた、神に喜ばれる供え物となるためにほかなりません。17: そこでわたしは、神のために働くことをキリスト・イエスによって誇りに思っています。18: キリストがわたしを通して働かれたこと以外は、あえて何も申しません。キリストは異邦人を神に従わせるために、わたしの言葉と行いを通して、19: また、しるしや奇跡の力、神の霊の力によって働かれました。こうしてわたしは、エルサレムからイリリコン州まで巡って、キリストの福音をあまねく宣べ伝えました。

2. ローマの信徒への手紙第12章1節

20 1: こういうわけで、兄弟たち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です。

私どもの課題

25 ① ローマの信徒への手紙第15章は、使徒パウロの思いを集中的に表現する。珍しく、自分を「祭司」と呼ぶ。祭儀を主宰してきたからではない。キリストの教会は、神殿、そこにおける祭儀から自由になっている。しかし、礼拝をする。神に仕えるわざ（サービス）をする。この礼拝において献げものをする。パウロは異邦人を神に献げるために自分は働いてきた、と言う。既に第12章で献身を勧める。必ず全存在を捧げる。礼拝は献身のわざなのである。

30 ② 日本では伝道者として召されることを特に献身と言う。私は、それを好まない。伝道者だけが献身するのではないからである。礼拝で献げる献金は、献身のしるしだ、と言うことが多い。これが飾り文句ではなく、現実の出来事となることが求められる。たてまえではない。本音が別にある訳ではない。献身者であるということが日常化する。修養会は常に献身者修養会である。修養会は、その原点に戻ることである。

35 ③ ハイデゲルベルク信仰問答の問一は、こう言う。
生きるにも死ぬにも、あなたのただ一つの慰めは何ですか。

私が私自身のものではなく、体も魂も、生きるにも死ぬにも、私の真実の救い主イエス・キリストのものであることです。

この方はご自分の尊い血をもって、私のすべての罪を完全に償い、悪魔のあらゆる力から私を解放してくださいました。……

- 5 そうしてまた、ご自分の聖霊により私に永遠のいのちを保証し、
今からのち、この方のために生きることを心から喜び、
またそれにふさわしくなるように、整えてもくださるのです。

- ④ 献身こそ慰めに生かされている者の生きる姿勢である。ローマの信徒への手紙第6章が語るように、洗礼を受けた者は死んで生きるのである。もはや自分のものではなく、神のものとして生きるのである。キリストのものとして生きるのである。私はクリスチャンという通称を使わない。金沢伝道のときに私どもの営みは、外国のもの、アメリカのもの、とみなされていることを痛感した。英語で自称することはない。使徒言行録は信仰に生きる者を弟子と呼んだ。それもよい。しかし、その基礎となるのは、私どもの全存在が贖われ、神のもの、キリストのものとなっていることである。このキリストのものであるキリスト者の存在をパウロは、こう
- 10
- 15 語っている。

コリントの信徒への手紙Ⅰ第3章

16:あなたがたは、自分が神の神殿であり、神の霊が自分たちの内に住んでいることを知らないのですか。17:神の神殿を壊す者がいれば、神はその人を滅ぼされるでしょう。神の神殿は聖なるものだからです。あなたがたはその神殿なのです。18:だれも自分を欺いてはなりません。

- 20 コリントの信徒への手紙Ⅰ第6章

しかし、みだらな行いをする者は、自分の体に対して罪を犯しているのです。19:知らないのですか。あなたがたの体は、神からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿であり、あなたがたはもはや自分自身のものではないのです。20:あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。だから、自分の体で神の栄光を現しなさい。

25

聖書テキスト その2

(ここでは特に拙著『説教への道』を参照されたい。)

コリントの信徒への手紙Ⅰ第14章

- 1:愛を追い求めなさい。霊的な賜物、特に預言するための賜物を熱心に求めなさい。2:異言を語る者は、人に向かってではなく、神に向かって語っています。それはだれにも分かりません。彼は霊によって神秘を語っているのです。3:しかし、預言する者は、人に向かって語っているので、人を造り上げ、励まし、慰めます。4:異言を語る者が自分を造り上げるのに対して、預言する者は教会を造り上げます。……9:同じように、あなたがたも異言で語って、明確な言葉を口にしなければ、何を話しているか、どうして分かってもらえましょう。空に向かって語る
- 30
- 35 ことになるからです。10:世にはいろいろな種類の言葉があり、どれ一つ意味を持たないものは

ありません。11:だから、もしその言葉の意味が分からないとなれば、話し手にとってわたしは外国人であり、わたしにとってその話し手も外国人であることになります。12:あなたがたの場合も同じで、霊的な賜物を熱心に求めているのですから、教会を造り上げるために、それをますます豊かに受けるように求めなさい。……16:さもなければ、仮にあなたが霊で賛美の祈りを唱えても、教会に来て間もない人は、どうしてあなたの感謝に「アーメン」と言えるでしょうか。あなたが何を言っているのか、彼には分からないからです。17:あなたが感謝するのは結構ですが、そのことで他の人が造り上げられるわけではありません。18:わたしは、あなたがたのだれよりも多くの異言を語れることを、神に感謝します。19:しかし、わたしは他の人たちをも教えるために、教会では異言で一万の言葉を語るより、理性によって五つの言葉を語る方をとります。……預言は、信じていない者のためではなく、信じる者のためのしるしです。23:教会全体が一緒に集まり、皆が異言を語っているところへ、教会に来て間もない人が信者でない人が入って来たら、あなたがたのことを気が変だとは言わないでしょうか。24:反対に、皆が預言しているところへ、信者でない人が、教会に来て間もない人が入って来たら、彼は皆から非を悟らされ、皆から罪を指摘され、25:心の内に隠していたことが明るみに出され、結局、ひれ伏して神を礼拝し、「まことに、神はあなたがたの内におられます」と皆の前で言い表すことになるでしょう。

エフェソの信徒への手紙第4章

25:だから、偽りを捨て、それぞれ隣人に対して真実を語りなさい。わたしたちは、互いに体の一部なのです。26:怒ることがあっても、罪を犯してはなりません。日が暮れるまで怒ったままでははいけません。27:悪魔にすきを与えてはなりません。28:盗みを働いていた者は、今からは盗んでははいけません。むしろ、労苦して自分の手で正当な収入を得、困っている人々に分け与えるようにしなさい。29:悪い言葉を一切口にしてはなりません。ただ、聞く人に恵みが与えられるように、その人を造り上げるのに役立つ言葉を、必要に応じて語りなさい。30:神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、聖霊により、贖いの日に対して保証されているのです。31:無慈悲、憤り、怒り、わめき、そしりなどすべてを、一切の悪意と一緒に捨てなさい。32:互いに親切にし、憐れみの心で接し、神がキリストによってあなたがたを赦してくださったように、赦し合いなさい。

エフェソの信徒への手紙第5章

30 1:あなたがたは神に愛されている子供ですから、神に倣う者となりなさい。2:キリストがわたしたちを愛して、御自分を香りのよい供え物、つまり、いけにえとしてわたしたちのために神に献げてくださったように、あなたがたも愛によって歩みなさい。3:あなたがたの間では、聖なる者にふさわしく、みだらなことやいろいろの汚れたこと、あるいは貪欲なことを口にしてはなりません。4:卑わいな言葉や愚かな話、下品な冗談もふさわしいものではありません。それよりも、感謝を表しなさい。5:すべてみだらな者、汚れた者、また貪欲な者、つまり、偶像

礼拝者は、キリストと神との国を受け継ぐことはできません。このことをよくわきまえなさい。
……18:酒に酔いしれてはなりません。それは身を持ち崩すもとです。むしろ、霊に満たされ、
19:詩編と賛歌と霊的な歌によって語り合い、主に向かって心からほめ歌いなさい。20:そして、
いつも、あらゆることについて、わたしたちの主イエス・キリストの名により、父である神に
5 感謝しなさい。

私どもの課題

- ① 私どもの共同体は言葉の共同体である。パウロがコリントの教会に対して語った時、第1
2章では聖霊の共同体を作るキリスト者には、それぞれに異なった霊の賜物（カリスマ）が与
10 えられていることから語り始める。そして、それぞれに異なった生き方を与えられている聖霊
共同体がひとつに生きることができるよう愛が与えられていることを第13章で語る。「愛の
賛歌」である。これは教会に与えられた愛の賛歌である。私どもはすべて愛のカリスマに生き
る。憐れみ深いサマリア人の共同体を作る。
- ② しかし、霊の賜物の歌は、それで終わらない。愛に生かされる者は言葉を語る。パウロは、
15 異言を語ることが愛したコリントの教会の人びとに穏やかに、それよりも預言の言葉を語ること
を勧める。預言は、現代の教会が説教と呼ぶ言葉に通じる。預言の特質は、通じる言葉、わ
かる言葉であることにあるが、それに留まらず、「慰めの言葉」（パラクレシス）、「教会を造
る言葉」（オイコドメオーの言葉、家〈オイコス〉を造る言葉）である。
- ③ コリントの信徒への手紙Ⅰは、預言が作る集会を語る。今日の説教を中心とする集会の原
20 型である。これ礼拝であることは、神の臨在を前提とする。神の臨在は、預言（説教）が聴か
れ、理解され、悔い改めが起こるとき、集まる者（教会員）の中に経験されるものである。こ
の預言は、本来、教会員の誰もが語り得たもののようである。
- ④ エフェソの信徒への手紙は、預言という言葉は用いないが、やはり言葉を吟味し、真実の
言葉を語るように求める。第5章1節では、神に愛されている神の子は、神に倣う、神に似る、
25 と言う。神の子供の言葉がある。神に倣う言葉である。憐れみ深い主イエスに倣う憐れみ深い
言葉を与えられる。第4章25節では、隣人に対する真実の言葉となる、と言う。それは29
節では、相手を造り上げる言葉（オイコドメオーの言葉、慰めの言葉）だと言う。私どもは「悪
い言葉」（ルター訳「腐ったおしゃべり」）を捨てる。私どもは思わず悪い言葉を語る。根性が
腐っている時には、それは「聖霊を悲しませる言葉」である。私どもが語るのは、キリストの
30 憐れみによる赦しを伝える言葉である。
- ⑤ 最後に留意したいのは、第5章19節である。讃美の歌と結びつく語り合いである。キリ
スト者の群は歌う群であった。様々な歌に生きた。歌いつつ語り合ったのである。私どもの修
養会そのものの言葉のありようが問われるのである。